

開業—一九六二年

父親が定年になるのを機に、郷里へ帰って開業し、両親と一緒に暮そうと考えた私は、病院勤めのかたわら度々帰豊して、土地を探しまわりました。

それまで医局の命ずるままに、あちこち病院回りをしていた私には、土地を買えるだけの資金は全くありませんでしたから、大変なことでした。土地を貸して下さる人もなく、お金を貸してくれる銀行もありませんでした。

私が途方に暮れている姿を見た母が、「東田農協の組合長をやっていらっしゃる朝河さんに相談してみたら。」とすすめてくれました。

朝河さんにお逢いして事情を説明したところ、すぐに「私の土地を必要なだけ提供しましょう。」とおっしゃって下さいました。

私が「お金はありませんけど。」と申し上げますと、「将来払えるようになった時に支払ってくればよいから。」とおっしゃって、東雲町一六二番地の土地七十坪の名義を、すぐその場で私名義に変える手続きをして下さいました。

初対面の男に、代金も受けとらないうちに、ぽんと土地を提供して下さいる人が、この世にいらっしゃるなんて、全く夢のようでした。

今ある病院も福祉村もすべては、この朝河さんのおかげなのです。

両親は一九四五年六月の空襲で焼け出されてから、暫くあちこちを転々とした後に、吾妻町にできた市営住宅で暮らしていました。

母は婦人会の役員など地元での仕事をいろいろしていた関係から、東田農協の朝河さんとのおつきあいも始まったのだらうと思いますが、この母の息子というだけで、土地をただで提供して下さいった朝河さんには、いくら感謝しても感謝しきれない気持ちで一杯です。

建物は従兄の青山建設に頼み、建設費は、先ず、朝河さんからいただいた土地を担保に医療金融公庫から借りた分だけを支払い、その後は、診療報酬が入る度に支払ってゆきました。

でも、土地代金の支払いは、随分遅れましたけれども、朝河さんからは一度も催促されませんでした。